

病は知から

だいちよう
大腸がん

日本人のがんの中で、2番目に多い大腸がん。臓器別の死亡者数も、女性では第1位、男性では第3位。しかし、早期に発見できれば、決して治りにくいがんではないのです。

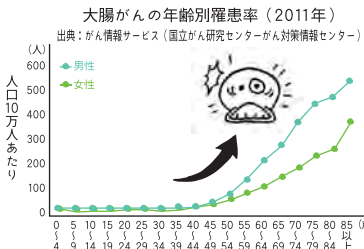
「大腸がん」って、どんな病気？

治る可能性の高いがん



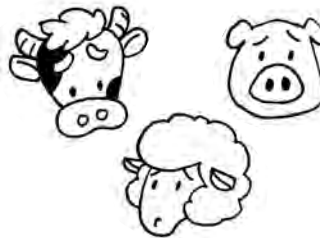
死亡者数では上位に入りますが、早期に発見できれば、内視鏡治療や外科切除などで完治できる可能性が高いがんです。

高齢になるほど発症リスクは高くなる



他の多くのがんと同じように、高齢になるほど発症する人が多くなっており、特に40歳代から急激に増加します。

肉好きさんは要注意



牛・豚・羊肉をたくさん食べる人は大腸がんを発症しやすくなることが分かっています。大切なのは、野菜・運動・リラックス。

自覚症状に頼ってはダメ



痛みや違和感がないまま大きくなっていくのが大腸がん。血便などの異常に気づくころには進行してしまっていることも。

便潜血検査を受けよう



便に血が混じっていないかを調べるのが便潜血検査。40歳を過ぎたら、年に1回は検査を受けるのが早期発見のカギ。

遺伝性のものがある



家族や親戚に大腸がんにかかった人が多い場合は、遺伝性である可能性も。今は遺伝子診断もあるので、専門医に相談を。

患者さんの想いに応える
選択肢が広がる「大腸がん」の治療

日本では毎年10万人以上がかかるという大腸がん。そこで、治療に関する話を下部消化管外科の先生に聞きました。



早期に見つければ完治も見込めます。定期的に検査を受けましょう。

ベストな治療を選ぶべく患者さんとしつかりお話をしています。

下部消化管外科
富田尚裕 主任教授

大腸がんには自覚症状があまりないので、初期のがんから発見できる「便潜血検査」を定期的に受けることが重要です。ポリープや痔などが陽性になることもよくありますが、「きつと痔の出血だろう」などと自己判断をして放置することなく、もし陽性と言われたらまずはきちんと大腸の検査を受けていただきたいと思います。

大腸壁の内側浅くにとどまるがんであれば、内視鏡で治療することが可能です。それより深くまでがんが到達している場合は、がんの周辺の大腸と、転移の可能性があるリンパ節を切除する外科手術を選択します。外科手術の場合も、できる限り腹腔鏡での手術を行い、患者さんの体への負担がより小さくなるよう心がけています。

大腸がんの診断を受けて患者さんが最も心配されるのが、人工肛門になるのかどうかということ。兵庫医科大学

学病院では、肛門に非常に近い直腸がんでも、新しい手術法などによりほとんどの例で肛門を温存することができています。最近では、効果的な抗がん剤や分子標的治療薬が出てきて選択肢が増えており、化学放射線療法を併用することでも高い治療効果を上げています。

兵庫医科大学病院では、内科、外科、放射線科、病院病理部などの医師が集まって症例検討会を行います。治療の方針を検討する際には、患者さんお一人おひとりのライフスタイルまで考慮に入れて、ご本人やご家族にとって最善と思われる方針を選択したいと思っています。特に高齢の方であれば、家族構成やご本人の体力、退院後の生活まで含めて考えます。患者さんやご家族のご希望をしっかりと伺い、一番納得していたいただける治療をしています。くことを常に念頭に置いています。